






学位論文審査の結果及び学力の確認の結果の要旨

学位申請者氏名	松村康平		
学位論文名	経管栄養の要介護高齢者における口蓋の剥離上皮膜の形成過程 (The Formation Process of Membranous Substances on the Palates of Elderly Persons Requiring Nursing Care with Tube Feeding)		
論文審査委員	主査：	松本歯科大学 教授	黒岩 昭弘 
	副査：	松本歯科大学 教授	山賀 孝之 
	副査：	松本歯科大学 准教授	田所 治 
	副査：		
	副査：		
学力の確認	実施年月日	2020 年 11 月 2 日	
	試験方法	口答 ・ 筆答	
学位論文の要旨			
<p>【目的】 剥離上皮膜を形成しやすい要介護高齢者に対する口腔ケアの間隔を検討するために口蓋の剥離上皮膜の形成過程と口腔ケアに要した時間を検討した。</p> <p>【対象および方法】 経管栄養の要介護高齢者のうち口腔乾燥の臨床診断基準（柿木）の1度以上の17名を調査対象者とした。入院記録より年齢、疾患、栄養摂取状況、寝たきり度を確認し、Japan Coma Scale、意思疎通の有無、発語の可否、介助歯磨きと粘膜ケア（歯面清掃と粘膜ケア）を実施してから3時間後、6時間後、12時間後、24時間後、48時間後に口蓋の付着物を観察すると共に一部を採取し、「なし」、「粘液物」「粘稠物」「膜状物」の4種類に分類した。なお調査期間中は、病院職員による口腔ケアを中止した。通法に従い付着物のヘマトキシリンエオジン染色（HE染色）標本を作製し、上皮部分が認められたものを剥離上皮膜と診断した。さらに介助歯磨きと口蓋の付着物の除去を含めた粘膜ケアを行い、ケア時間を測定した。</p> <p>【結果および考察】 付着物の種類毎における上皮成分面積率の中央値は、膜状物が84.2%、粘稠物が45%、粘液物が0%で、すべての組み合わせで有意差が認められ、膜状物が最も上皮成分の面積率が高く、粘液物が最も低かった。粘膜ケアを行ってから3時間後は、52.9%に粘液物を認め、6時間後は35.3%が粘稠物、11.8%に膜状物を認めた。12時間後に膜状物は23.5%、24時間後に47.1%、48時間後に52.9%の者に認めた。膜状物は粘液物の形成時間より有意に長いことが認められた。膜状物を除去することを含めた口腔ケアの時間は粘液物よりも優位に長くかかることが認められた。口腔乾燥傾向のある経管栄養の要介護高齢者の粘膜ケアは、6～12時間の間で1回行うことが妥当であると判断できた。</p>			
学位論文審査結果の要旨			
<p>論文では剥離上皮膜を形成しやすい要介護高齢者に対する口腔ケアの間隔を検討するために口蓋の剥離上皮膜の形成過程と口腔ケアに要した時間が報告された。</p> <p>付着物の種類毎における上皮成分面積率の中央値は、膜状物が84.2%、粘稠物が45%、粘液物が0%で、すべての組み合わせで有意差が認められ、膜状物が最も上皮成分の面積率が高く、粘液物が最も低かった。</p> <p>粘膜ケアを行ってから3時間後は、52.9%に粘液物を認め、6時間後は35.3%が粘稠物、11.8%に膜状物を認めた。12時間後に膜状物は23.5%、24時間後に47.1%、48時間後に52.9%の者に認めた。膜状物は粘液物の形成時間より有意に長いことが認められた。膜状物</p>			

(様式第 15 号)

を除去することを含めた口腔ケアの時間は粘液物よりも優位に長くかかることが認められた。口腔乾燥傾向のある経管栄養の要介護高齢者の粘膜ケアは、6～12 時間の間で 1 回行うことが妥当であると判断できたと報告している。

経管栄養の要介護高齢者における口蓋の剥離上皮膜の動態や性状、形成に要する時間、除去に関する示唆を加えた論文はなく、学位論文に値すると判断した。

学力の確認の結果の要旨

申請者は目的・対象および方法・結果および考察・将来への示唆に関して、審査委員の質問に明確かつ的確に答え、学位を授与するに値する学力を有することを確認した。

判定結果

合格

・ 不合格

備考

- 1 学位論文名が外国語で表示されている場合には、日本語訳を()を付して記入すること。
- 2 学位論文名が日本語で表示されている場合には、英語訳を()を付して記入すること。
- 3 論文審査委員名の前に、所属機関・職名を記入すること。